

大乘佛教小觀

和田昌太郎

佛教理解に關する、佛以後の佛教者の生活の體驗と云ふものが入つて來なくてはならない、と云う大拙博士の所説は、私の『大乘佛教學』に示唆を興える大なるものであると云わなければならぬ。

自己とは如何なるものであるか、という問題は、所謂、宗教經驗の反省的自己理解というものでなければならぬ。所謂、そこからそこへ、自己から自己へというものでなければならぬ。私の『大乘佛教學』も、そこからというものでなければならぬ。

大乘佛教とは如何なるものであるか。私に、私が生きるということとを問う佛は、いのちというものでなければならぬ。即ち、『大乘佛教學』は生命の自覺の學といわなければならぬ。寸心博士は、我々の生命は絶対現在の自己限定として成立する、と云つてゐる。念々に生死して而も生死せぬ生命、之を我々の自己の靈性上の事實に於て把握しなければならぬ、とも云つてゐる。所謂、自己自身を超越することは、何處までも自己に返ることである、という眞の自己とは、生命の自覺というものでなければならぬ。所謂、即非的に、佛と人間の逆對應的關係、人即佛であるのである。そこには、所謂、佛の絶対悲願を表わす名號不思議を信ずるといふ所謂、靈性的自覺というものがなければならぬ。且つ、この自覺

というものも、所謂、大智即大悲のさとりというものでなければならぬ。寸心博士は、慈悲とは、我々の自己が、徹底的にかゝる立場（眞理は、我々が物となつて考へ、物となつて見る所にあるのである。）に立つことである。絶対者の自己否定的肯定として働くことである、と云い、又、我々の自己は、その根柢に於て慈悲的である。慈悲とは何處までも相反するものが、矛盾的自己同一的に一となることである、とも云つてゐる。

佛教が私の問題になるということは、如何なる意味を持つものであるか。所謂、忽然として自覺する私のこの不安というものは、學者の所謂、何故に我々の自己は、自己自身の底に深く反省するに従つて、即ち自覺するに従つて、宗教的要求と云ふものが現れ、宗教的問題に苦まねばならないのであるか、という問題でなければならぬ。我々の自己が絶対的自己矛盾的存在であるということは、我々に所謂、二者擇一を迫る生死の問題であると云わなければならぬ。然も、我々の自己が、かゝる問題に直面するということは如何なる意味をもつものであるか。學者は、我々の宗教心と云ふのは、我々の自己から起るのではなくして、神、又は佛の呼聲である、と云う。根柢的に自己矛盾的なる人間の世界は、我々を宗教に導く機縁は到る所にあるのである、とも云う。絶対者の自己否定に於て、我々の自己の世界、人間の世界が成立すると云うことは、矛盾的存在である我々の自己が、佛の呼び聲に應じたということではなければならない。所謂、矛盾が自己同一であつたと云うことでなければならない。我々の眞の自覺的自己―無自覺の自覺というものでなければならない。上に云つた如く、名號は所謂、機法不二のそれ

所謂、その眼は、遠く苦惱なき(滅)彼岸の世界を見つゝ、不安の満ちるこの世界を見つめてゐる、その足は、恰も百獸の王の歩みの如く、何もの(衆生)にもその頼りとなり能うその尊嚴―所謂、出山の釋迦(佛)。大乘佛教、その流れはそこから、と云わなければならぬ。先にも云つた如く、我々の自己が絶対的自己矛盾的存在であるということ、然も、それがそこからということ(人格の問題)は、又、我々の自己の願ひといふものが、この釋迦の出山にあるということではなければならぬ。佛陀の正覺は、所謂、大智即大悲の經驗といふものでなければならぬ。大拙博士の、さとり―無媒介で、主客未分のところから出る全體性の感覺、といふものでなければならぬ。經驗は生きるものでなければならぬ。所謂、大智即大悲の即非の論理を生きていふものでなければならぬ。かかる大智即大悲(―方便―廻向)といふことが、大乘佛教の自覺といふものでなければならぬ。言わば、大悲の自覺といふものが大乘佛教である、と云わなければならぬ。所謂、その立場を他と區別すると云われる菩薩の思想といふものも、その所以をこゝに見出すといふものでなければならぬ。所謂、各宗の祖師といわれるものは、すべて斯くの如き世界に生きた者と言わなければならぬ。そこに、大乘佛教といふものがあると云わなければならぬ。すべての學者もその外ではない、と云わなければならぬ。

我々の自己が、その根柢に於て慈悲的であり、又、宗教的である、といふことは、一面、私の存在が大悲によりてということではなければならぬ。所謂、人間の問題は宗教の問題であり、宗教のそれはまた人間のそれではなければならぬ―人即佛、佛即ち衆生、所謂、生死即涅槃といふ所以といわなければならぬ。所謂、空を見

て、實際を證せざる菩薩の生活といふものの意義ある所以もそこといわなければならぬ。

所謂、自力と言ひ他力と云う對蹠の立場に立つと思われる禪宗、眞宗といふものも、それが唯抽象的に一方的立場に立つということでは、それ自身の眞の立場を失うということではならぬ。兩者は夫々自己の立場を越えてそれ自身を自覺するとき、ともに大乘として自己の立場といふものがあるといわなければならぬ。自己の眞源に徹するとき正覺としての自己の立場を獲得するものといわねばならぬ。兩者がともに大乘佛教といわれる所以があるといわねばならぬ。(眞禪即非の問題)

大乘佛教が眞に現實的に至らなかつた、とか、積極的に把握せられてゐない、といふことは現實即絶対の自覺としてのそれが眞に把握せられていないということではなければならぬ。そこには大乘といふことがないということではなければならぬ。生命の自覺として大乘佛教は、慈悲として常に大乘といふことでなければならぬ。先學の云う大乘佛教の世界的使命といふことは大乘といふことでなければならぬ。所謂、大乘佛教思想史といふものもそこにあるといわなければならぬ。大乘即今、かゝる生命の自覺として我々の自己は所謂、歴史的形成といふものでなければならぬ。そこにはどこまでも、大悲の問題があるといわなければならぬ。所謂、上求菩提、下化衆生の人間としての菩薩の行願があるといわなければならぬ。

○大乘佛教は、「大悲の問題」として、「大乘佛教學」の問題でなければならぬ。所論、なお明晰を缺く、且つ、十成に程遠い。學問的反省のこの機とともに、大方の御教示を乞う次第。